

「相中相高百年史」より
(昭和初期の相馬中学校 4)

4 体操の授業・運動会・通学

1931(昭6)年「中学校令施行規則」が改正され、一週3時間であった体操が、全部5時間に増加され、作業科という時間を設けて勤労精神を高揚し、修身や公民科によって、道徳の国民的自覚や愛国思想を促した。当時の体操は現在のラジオ体操のようなもので、時々鉄棒が加わったり、競技と呼ばれた円盤投げや砲丸投げも行われた。当時の生徒の履物は高下駄であったが、兵式体操の時にはゲートルを巻き、短靴に履き替えた。

スポーツに関する熱意は異常と思われる程で、県下中学校体育大会などは、普通、福島で開催されたが、相中の生徒のほとんどが応援に行ったという。大半は岩沼回りで列車を利用したが、ワラジや高下駄を履いて、朝の1時か2時頃出発し、6、7時間かけて歩き通し、8時ごろに到着した健脚もかなりいたという。当時12校あった中学校の中で、福島、会津、相馬の三中学が抜きんでいたのである。

毎年、9月23日の彼岸の中日には、城趾二の丸で盛大に相中大運動会が挙行され、体操教師の指導を受けながらも、生徒がほぼ主体となって実施したという。特に入場行進は華やかで、すでに一年生から三年生までの下級生が入場している開会式場に、ラップ手、校旗、校長、五年生、四年生の順序で隊列が入って来ると、スタンドの観客席からは万雷の拍手が起きたという。

特に近郷の各小学校から六年生が四名ずつ参加して行なう、各校対抗リレーが呼び物となっていた。近郷といっても、南は浪江や金房あたりから、北は新地までも含んでいた。

……当時の相中の学校行事は、すべて軍事色の濃いものであった。運動会にも銃をかついでの分列行進や、手投げ弾投げ競争、荷車を戦車のように飾りたてての模擬戦闘訓練などが公開され、見物に来た父兄達の喝采を浴びた。

当時、マラソン大会は5月7日の開校記念日に実施されていた。

グラウンド……石上……大坪……黒木……学校

グラウンド……八幡……日立木……学校 の二通りのコースがあったのである。

当時の相中生が世界大恐慌下の厳しい生活環境の中で、向学心に燃え、将来国家社会の幹城たらんと刻苦勉励した姿が偲ばれるのである。

昭和初期という時代柄のせいもあるが、当時の中学生の生活様式は、いかにも泥くさく質実剛健であった。遠距離の生徒で自転車を使用する者は極くまれで、四、五年生になって初めて、一クラスのうち、二、三人という状態であった。しかもそれらは、原町とか小高という余程遠い者だけで、磯部などは全員が徒歩通学だった。